

活動報告：ミュージックチャイルド

1. 「ミュージックチャイルド」について

広島文化学園大学・短期大学 子ども・子育て支援センターでは、平成22年度より特別な支援を要する幼児・小学生を対象とした音楽療法「ミュージックチャイルド」を、非常勤講師とともにやってきた。平成23年度から「音楽療法実習Ⅰ」の実習先として、音楽学科の2年生（音楽療法士資格取得希望者）「音楽療法実習Ⅰ」履修学生が、非常勤講師の行う音楽療法セッションを見学している。また、平成27年度からは、音楽療法を受けたい児童を積極的に受け入れているが、その時の助手を、音楽療法資格取得希望者に任せ、本格的な学外実習施設として機能している。

「ミュージックチャイルド」の目的は、音楽をツールとし、意図的・計画的に子どもの発達を支援することである。対象児の行動の変容や発達を促進するとともに、対象児の表現力の向上により、特に保護者が子どもの変化を喜び、より望ましい親子の愛着形成が成果として見られている。

2. 令和3年度の実践報告

「ミュージックチャイルド」で行う音楽療法は、インテーク面接をはじめとする、アセスメント、目標設定、実施計画の作成、セッション、保護者とのカンファレンスの流れで実施されている。令和3年度は、本学において資格を取得した卒業生、松原美早・山崎賀子に主なセラピストを実施してもらった。このセッションについては筆者がスーパーバイザーを務め、定期的にスーパービジョンを実施し、セッションがより効果的に進むように取り計らった。令和3年度前期はコロナ禍のためにミュージックチャイルドの実施を中止した。令和3年度後期は、A君のセッションを開始し、令和3年度としては5回のセッションを実施した。月別の実施回数は11月2回、12月2回、3月1回であった。1月・2月はコロナが蔓延したため、セッションを中断する中で、また再開して音楽療法を続けることはとても大変なことであった。このセッションは令和4年度にも引き続き実施しており、終結には至っていない。

対象児童の年齢は、7歳の男児で、対象児の診

断名は、自閉症スペクトラム障害である。

3. 指導者の立場より

令和3年度も、本学を卒業して、『音楽療法士』として活躍している卒業生に積極的にセッションを展開してもらった。筆者は、このセッションに関して、スーパーバイザーという立場に徹し、毎回のセッション内容に関しては静観し、スーパーバイザーという立場で、定期的にスーパービジョンの時間に、2人の講師を指導した。本学で音楽療法士になるための講義をしっかりと受け、授業の中でも計画・実践・振り返り（スーパービジョンにあたる）を繰り返し多くの実践を経験してきているので、セッションを任せることに関しては、指導者として何の不安もなかった。定期的実施するスーパービジョンの中で、当事者ではない客観的な立場、また、音楽療法士として先輩の立場からの『気づき』を彼女たちに伝え、そのアドバイスを次回からのセッションに活かしてもらう方法を実施した。実際、自己を表現することが難しかったA君は、数回のセッションを経験して、まずはこの場所が安全な場所であり、二人の先生と音や音楽を体験することで少しずつではあるが、音楽療法の時間を楽しめるようになっていった。もちろん、A君が変化していきつつあることは、決してミュージックチャイルドの時間による効果だけとは言い難いが、楽しい時間の共有はA君が成長していく一助になったと言えるのではないかとと思われる。コロナ禍において、コンスタントにセッションは展開されなかったが、音楽療法の効果はあったのではないかと考える。

4. 改善点と将来構想

ここ数年は卒業生を育てるという講師体制でミュージックチャイルドが展開している。セッションの組み立て方や対象児とのかかわり方など、様々な問題点を考慮しながら慎重に進め、それぞれのセッションで音楽療法の効果を実証することを目的としている。

今後も引き続き多くの対象児と、より丁寧なセッションを展開していきたいと考えており、ミュージックチャイルドで実施する音楽療法の実践を通して、本校が児童領域の音楽療法の拠点となるべく、引き続き研鑽を積みたいと思う。

(文責：学外学部音楽学科 和田 玲子)



写真① 始まりの歌を歌っているところ



写真② 2人でリズムを合わせています。